名月――八月の詩

一海 知義

作者

一海知義

昭和四（一九二九）年～平成二十七（二〇一五）年。中国文学者。神戸大学名誉教授。奈良県の生まれ。昭和二十八（一九五三）年、京都大学文学部卒。陶淵明・陸游から夏目漱石・河上肇まで研究の対象は広く、『漢詩一日一首』（平凡社）『漢詩入門』（岩波ジュニア新書）など、優れた入門書やエッセイも多い。『一海知義著作集』（全一一巻、藤原書店、平二〇～令二）がある。

出典

本文は『漢詩逍遥』（平成十八（二〇〇六）年刊、藤原書店）によった。同書は、Ⅰ漢詩逍遥、Ⅱ河上肇を語る、Ⅲ陸游を読む、Ⅳ漢字・漢語、Ⅴ帰林閑話、Ⅵ雑纂の六部からなり、本文に載録した「名月――八月の詩」は、Ⅰの「四季の詩――漢詩四方山話」中の一篇である。

なお、『源氏物語』の現代語訳は本書掲載にあたり、原文に追加した。教科書に収録するに際して、漢字・送りがな・句読点などについては教科書として統一した体裁に改めた。ほか、以下の点に関して出典との異同がある。「二千里外の故人の心」（原文P三八・1）を教科書教材に合わせて、「二千里外故人の心」（教科書P一六二・上4）に、「八月十五日の夜、禁中にて独り直し」（原文P三八・3）を教科書教材に合わせて、「八月十五日夜、禁中に独り直し」（教科書P一六二・上7）に、「猶お想う　清光　同じく見ざることを」（原文P三八・5）を教科書教材に合わせて、「猶お恐る　清光　同じくは見ざるを」（教科書P一六三・上10）に、「秋陰足し」（原文P三八・6）を教科書教材に合わせて、「秋陰足る」（教科書P一六三・上11）に、改めた。

参考文献

❊**教師用**

「白居易研究講座　第4巻　日本における受容　散文篇」　勉誠出版　平六

太田次男ほか編

「源氏物語と白楽天」　中西進　岩波書店　平九

「和漢朗詠集」（角川ソフィア文庫）三木雅博　平二十五

❊**生徒用**

「白楽天」（角川ソフィア文庫　ビギナーズ・クラシックス中国の古典）下定雅弘　平二十二

発問例

●一六二ページ

問　光源氏は「故人心」（上13行目）の句で誰を思っているか。

補 答　宴をともにした宮中の人たち。

著者の解説では「都にのこして来た女たち」であるが、『源氏物語』全体の内容を前提として、原詩と対比的に述べたものである。なお、「故人」を都から離れた須磨にいる光源氏自身のこととして、元稹が都を思う心情に例えたのではないかとの質問もあり得るが、その前に「所々ながめたまふらむかし」とある文脈からすれば、「故人心」は都にのこしてきた人々の思いとするのが自然な理解かと思われる。ただし、この句を吟じて涙を流した源氏の心情まで含めて想像すれば、互いを思い合うどちらをも結局は指すのではないか、とする見方も成り立つことには留意したい。

語句の研究

●一六二ページ

上6元稹　七七九年～八三一年。中唐の文人・官僚。八〇三年、白居易とともに書判抜萃科に及第して同じく秘書省校書郎に就き、生涯の交わりを結んだ。八一〇年、宦官と対立して監察御史の職を解かれ、江陵（現在の湖北省荊州市）に左遷された。地方官を歴任した後に都に還り、宰相にまで至ったが、地位は安定せず、武昌軍節度使で没した。

上9『源氏物語』　物語。五十四帖。作者は紫式部。十一世紀初め頃成立。須磨の巻は、朧月夜との関係が発覚した源氏が、紫の上を都に残して須磨に退き、愁いのうちに過ごした日々を描く。

下13藤原公任　九六六年～一〇四一年。四条大納言と称される。学芸に長じ、和歌・漢詩・音楽に才能を発揮した。歌論書の『新撰髄脳』、撰集として『金玉集』『三十六人撰』がある。晩年は出家して洛北に隠棲した。

下13『和漢朗詠集』　藤原公任が漢詩文の秀句や和歌の優れたものを主題ごとに分類して編んだ詞華集。上巻は四季、下巻は天象・草木・禽獣・遊宴にわたって部立てされている。採録された漢詩句のうち、中国のものでは白居易が七割近くを占める。

●一六三ページ

上1江陵　現在の湖北省荊州市に属する長江中流北岸の都市。古くは楚の都である郢があった。その後も水陸交通の要所として発展し、六朝の梁では都が置かれたこともある。なお、『和漢朗詠集』には元稹が江陵で作った「過二襄陽楼一呈二上府主厳司空一」の句「払レ水柳花千万点、隔レ楼鴛舌両三声（水を払う柳花は千万点、楼を隔つる鴛舌は両三声）」の句が「暮春」に採られている。

解説

この文章は、日本では「仲秋の名月」と言うのに対して、中国には「名月」という語はなく「明月」と言うことから説き起こして、中国ではどのような月であれ月は月なので「名月」のように他と区別した言いかたはないのではないかと述べる。では日本ではなぜ「名月」と言うのかについて説明はないが、「名月」と言わない中国の裏返し、つまり、日本ではそれぞれの月を区別しているから、ということになるのだろう。実際、日本文学における月は、その形態によって細かく分けられ、中国にはない十三夜の行事（豆名月・栗名月）もある。また、月齢の違いとも関連して、月の見える時間についても敏感と言える。もちろん全体の傾向としてということではあるが、著者の卓見としてよいだろう。

また、日本で最も知られた十五夜の月の漢詩として白居易が元稹を思って作った詩を挙げ、『源氏物語』中で源氏がそのうちの頷聯を吟誦していた場面と比較して、男性の文学であった中国古典詩と女性の文学である『源氏物語』との違いに説き及ぶ。文学における表現がその担い手個人の心情のみならず、社会生活との関連が深いことを生徒に気づかせる契機となる。この単元で扱った送別や望郷が、中国の士大夫の社会生活において不可避の普遍的なテーマであったことを改めて説明することもできるだろう。

士大夫は、古典の知識を蓄え、高度な読み書きができる階層である。儒教的な倫理から言えば、そのリテラシーは、天下の安寧のために費やされなければならない。だがそのために、しばしば政争に巻き込まれ、左遷の憂き目に遭った。思い通りに天下の統治に参与できる方が少ないとすら言える。白居易と元稹のように生涯の友人であることを貫くのは、あるいは一途な恋を貫くのと同様、さまざまな困難を伴うのであった。

著者は最後に、二人がともに同じ月を見られたのならよいのだが、「それもかなわぬ願いなのだろうか」と結ぶ。出会いの時間は短く、別れの時間は長い。せめて月だけでもと願うが、それすらもかなわないかもしれない。なぜなら、元稹のいる江陵は、白居易のいる長安と異なり、遠く離れた長江に面して、気候も異なるからである。つまりここで中国という土地の広さ、黄河流域と長江流域では気候や風物が相違することへの認識が促される。これは、京都と須磨の違いの比ではない。そうした地理感覚や自然環境の相違もまた、日本と中国それぞれの文学の違いを生む要因となっている。

参考

参考として、「名月 ── 八月の詩」の前半の部分を掲げる。

中国の詩文に「名月」という言葉は見えないようである。漢和辞典の類は、中国での用例は挙げず、『和漢三才図会』など日本の文献だけを引く。日本には、

　名月や池をめぐりて夜もすがら

という有名な芭蕉の句があり、「仲秋の名月」という言葉もある。しかし中国では、「名月」といわず「明月」という。

名月と明月は、発音すればともにメイゲツ、中国音もミンユエと同じだが、なぜ中国には「名月」という言い方がないのか。

たぶんそれは「月」が一つしかないからだろう。中国にも「名酒」という言葉はある。考えてみると、酒の場合はさまざまな種類があり、中国だけでも、紹興酒、茅台酒、汾酒、竹葉酒、杏露酒、最近では、五糧液、酒鬼など。目を世界に転ずれば、日本酒、ビール、ウイスキー、ウオッカ、テキーラ……。それらの中の「名」のある「酒」、有名なうまい酒が、「名酒」である。

ところが、月は一つしかない。いや、月も満月、三日月、十六夜の月と、いろいろあるではないか、と言われるかも知れぬ。しかしそれらは外形のちがいであって、紹興酒とテキーラのような質的な差異ではない。

「月」はどんなに形を変えても「月」だから、中国では「名月」（「有名」な「月」）という言い方がないのではないか。